2

翌年の十月、雨の夜。
東京本郷湯島の下宿屋。仕舞屋風の二階。そこは山内ヨネ子（二一）の寓居である。

ヨネ子と野口が対座している。
野口は純白に金ボタンの颯爽たる制服姿。

野　口　　え？　受け取っていねー？
ヨネ子　　はい。そのような物はここへは届いておりません。
野　口　　おかしいなイ。確かにお送りしたのですがなシ。
ヨネ子　　そう言われましても……。

そこへ下宿のお内儀（かみ）が「はい。お邪魔様」と新しい茶を運んでくる。

ヨネ子　ねえ小母さん、去年のことですけど、野口さんからわたくし宛に何か小包が届きまして？

お内儀　小包でござんすか？　はてねえ……中味は何です？

ヨネ子　外国の医学書ですって。

野　口　ジェンナーの『近代免疫学序説』という本です。ヨネ子さんの受験の参考になるかと思ってお送りしたのですが。

お内儀　さあ。一向に存じませんがねえ。

野　口　うーむ。確かに芝の郵便局からお送りしたのですがなし。

ヨネ子　それなら郵便の手違いでしょう。きっとどこか余所の家に配達されちまったんですよ。

野　口　そんな手違いがあるのですか。

お内儀　ええ、この頃はチョイチョイあるそうでござんすよ。

野　口　なるほど。……ム、考えもつかなかったげんじょ確かにそだんなことかも知れねーべな。

お内儀　そんなことより野口さん、さっきから訊こう訊こうと思ってたんですがね。今日はまたいやに金ピカな服をお召しじゃござんせんか。ぜんたいどうしたんですそのなりは。

野　口　ンフ。（とニヤける）

お内儀　何です？

野　口　これは海港検疫官の制服ですよ。（ヨネ子に）どうですか。

ヨネ子　（？）何がでしょう？

野　口　たいへんよく似合っていると思いませんか？

ヨネ子　え、ええ。よくお似合いだとつい先刻も。

野　口　ハハハ、そうでしたな。そういえば先刻もお聞きしましたな。

（お内儀に）わたしは今年の春から横浜の海港検疫医となったのです。

お内儀　カイコウケンエキイ？

野　口　つまりですな、港に外国からの船が着いた時に船員や乗客の中に伝染病ゆえ罹ってる者がいねーかどうか調べるお役目です。伝染病の多くはそのようにして港から港へと黴菌が運ばれてまずはその周辺にて発生し、これを放置すればやがて広く猖獗をみるという例がきわめて多いのです。したがって衛生防疫上の観点から申せばこの港における検疫というものが最も重要な仕事なのです。それ、先月横浜でペスト騒ぎさあったばかりでねーですか。あの時驚くべき慧眼をもって『アメリカ丸』乗組員の中に二名のペスト病患者を発見したのが他でもねーこ

のわたしです。

お内儀　へーそんな騒ぎがございましたですか。

野　口　新聞さ読まねーのですか。吾が横浜検疫所は国際的にも大いなる名誉さ発揮したと出ておったでしょう。その手柄の大部分はこのわたしが挙げたと申し上げても過言ではねーのですよ。ねえヨネ子さん。

ヨネ子　ええ、ええ。そうなんですの小母さん。

お内儀　へーあなたがそんなお手柄をねえ。

ヨネ子　そのお手柄さ認められて、野口さんは今度清国の牛荘さいらっしゃるのですって。

お内儀　おやまあ次は外国へお出かけですか。それはまただんだん遠くへお行きあそばして、ねえ山内さん、ホホホ、まことに結構なことじゃありませんか。

野　口　今あちらではペストが大流行しておるのです。そればさ撲滅するために清国政府からの要請で日本からも防疫官吏ばさ派遣することさ決まって、このわたしにもその医師団の一員として是非とも加わって欲しいと、本日伝研の北里所長よりたってのお頼みがあったのです。

お内儀　たってのお頼み？　へー北里博士があなたに？

野　口　そうですとも。きみがいなくなると横浜のことが心配だげんじょも清国のペスト流行は今や国際的の関心事だ。ここは一つ惻隱の精神と義を見てせざるはの勇猛心を奮って是非とも彼の地のペストと戦ってきてもらいてーと。

お内儀　へー。

野　口　そこまで言われたらわたしとて会津男児です。快諾するしかねーでがんしょ。したから、分かりました、このわたしでお役に立てるのなら直ちに死地に赴き、この身ば擲ってでも必ずや彼の地のペストば撲滅して御覧に入れましょうとお答えしてまいったのです。

お内儀　何だか戦争にでも行かれるような口振りですね。

野　口　身の危険は戦争も同然です。いやむしろそれ以上かも分かんね。したからその一大事ば真っ先にここさご報告に上がったのです。ねえヨネ子さん。

ヨネ子　え、ええ。そうなのですって。

野　口　したけどまあこれで合点が行きました。いや、あなたにお送りした本の話です。配達夫の手違いとあらばこれは仕方のねーことだ。誰も責められね。ねね？

ヨネ子　あ、はい。

野　口　実はですな。本の間にヨネ子さん宛の手紙を挟んであったのです。自分で言うのもなんですがわたくしの赤誠ば尽くしたまことに素晴らしい名文でありました。御一読あらば必ずや心に深く感銘ば受けられたことでしょう。情けあるあなたのことですからきっと直ぐにお返事くださるはずだ。そう信じてわたしは千秋の思いで待ちました。したけどもあなたからのお返事は一向に来ねー。そのうち本の方は神田で売りに出される。これはいったいなじょしたことかとわたしは大いに煩悶いたしました。おかげでこの一年ほとんど安眠できていねーのです。

ヨネ子　それは……知らぬこととはいえ、申し訳のねーことを。

野　口　なに、手違いだったと分かってすっかり安心しました。これで今夜からはぐっすりと眠れるでしょう。

お内儀　それでその手紙には何と書いてあったんです？

野　口　それはこのわたしとヨネ子さんとの……オット危ね。なぜそれをあなたの前で明かさねばなんねーのですか。あなたはヨネ子さんのお身内でも何でもね、ただの下宿屋のお内儀さんでねーですか。

お内儀　いいじゃござんせんか、そんな言い方をなすっちゃ気になるのが人情

ってもんですよ。

野　口　人情だろうと何だろうとこれはきわめてプライヴェイトな事柄ですから、あなたのように断固艶消しの第三者に無闇に容喙していただきたくねーのです。だいたいあなたはさっきからいやにお茶ばかり持ってきますね。おかげでわたしとヨネ子さんはちっとも落ち着いて話ができねー。ねえヨネ子さん。

ヨネ子　え、ええ、まあ。

野　口　ほらヨネ子さんだってたいそう迷惑しとるでねーですか。少しは気を遣って二人きりにしてくれませんか。お茶ともう結構ですから。

お内儀　はいはい。これはどうもお邪魔さんでござんしたね。

お内儀、出て行く。

野　口　まったく困った人だなシ。ねえ？

ヨネ子　え、ええ。

野　口　さてと。

ヨネ子　……。

野　口　どうしました？
ヨネ子　は？
野　口　聞きたくねーのですか。
ヨネ子　（？）何がでございましょう。
野　口　手紙の中味です。
ヨネ子　あ、はい。あ、いえ、お聞きしたいですわ。
野　口　ンフ。……実はその手紙にはあなたとわたしとの二人のメムリーば綴ってあったのです。
ヨネ子　メ、メムリー？
野　口　んだ。……きみ知るや、貧しき書生の頃、初めてきみを知りぬ。そは懐かしき若松の日々、恋知り初めし日の甘美なる胸の疼きよ。きみ知るや、志す道の同じと知りたる日、喜び満ちぬ吾が胸中に。かの清き歌、三ノ町のチャペルの裏よ。そして去年の春、帝都済世学舎の窓の下、再びきみと相見えたり。そはもはや運命とこそ思し召せ。吾が胸なる想い、予感はついに或る確信へと至れり……聞いとりますか？
ヨネ子　あ、はい。聞いてますわ。
野　口　（咳払い）つまりですな。早い話、将来吾が好逑となるべき女子はあなたさ措いて他にはない、あなたこそ吾が永遠のファム・ファタアルである……とまあそのようなことが書いてあったのです。
ヨネ子　あの、野口さん。
野　口　イヤーすまね。こうして自分の口でしゃべると何だか無性に照れくせーもんだなシ。
ヨネ子　あの、申し訳ねーけんじょ。
野　口　ああいかん！　どうもさっきから無闇にお茶ば飲まされた所為で……すまねーけんじょちいっと後架ば拝借します。
ヨネ子　あ、はい、どうぞごゆっくり。

野口、出て行く。
ヨネ子、ため息をつく。
と、お内儀が顔を出す。

お内儀　憚りかえ？
ヨネ子　ええ。
お内儀　まったく図々しい男だねえ。いったいいつまで居座る心算なんだろう。

ヨネ子　横浜までお帰りのはずですから、いくら何でもそろそろだと……。

お内儀　それにしても察しの悪い男じゃないのさ。こちらに微塵も気のないことがどうして分からないのだろう。だいたい嫁入り前の娘の部屋に平気で上がり込んで長々と自慢ばかり垂れるような男にロクな人間はいませんよ。

ヨネ子　それでもあまり無下にはできませんわ。同郷の先輩ですし、角の立つようなことをしたくねー(ない)のです。

お内儀　そんな甘いこと言ってちゃ駄目ですよ。よござんすか山内さん。ああいう手合はね、はっきり肘鉄砲喰らわしてやらなくっちゃ堪えませんよ。放っとくとどこまでもつけ上がりますからね。何ならあたしの口から引導渡してやりましょうか？

ヨネ子　ありがとう小母さん。でも今夜はよしておきましょう。せっかく大変なお役目を仰せつかって異国にいらっしゃるというのですもの。お気の毒だわ。

お内儀　（タメ息）まああんたがそう言うんなら、あたしもこれ以上出しゃばりゃしませんけどね。けどくれぐれも隙を見せちゃダメですよ。ああいう男はちょっとでも隙を見せるとどこにつけ込んでくるか分かりませんからね。

ヨネ子　ええ。心得てますわ。

野口が急ぎ足で戻ってきた。

野　口　あ、やっぱりまた居る。さっきヨネ子さんも迷惑だと言ったばかりでしょうが。

お内儀　はいはい。邪魔者は退散いたしますよ。

お内儀、出て行った。

野　口　まったくあの人は油断も隙もねーですな(なし)。どこまで話しましたっけ？

ヨネ子　あの、野口さんそろそろ汽車のお時間が。

野　口　ああ思い出しました。実はここからが大切な話です。その清国牛荘での仕事だけんじょ、実は月俸も二百兩(テール)というなかなかの高給でしてなシ。わたしはこれを来たるべきアメリカ留学への渡航資金に充てる計画でおるのです。

ヨネ子　（驚く）アメリカさ行かれるのですか？

野　口　ええ。医学といえば猫も杓子もドイツさ行きたがりますけんじょ、無闇に敷居ばかり高くてどうせロクに研究などさせてもらえませんよ。その点アメリカ医学界は現在著しい発展の途上にあります。自由闊達に勉強して存分にわたしの実力ば発揮できるのはやはりアメリカだろうと考えております。幸いこの春ジョンズ・ホプキンス大学のフレキスナー教授来日の折、伝研で唯一人英語の堪能なわたくしが案内係さ勤めた御縁で同教授とは大いに肝胆相照らす仲となりました。教授は是非ともわたくしにアメリカさ来いとおっしゃってくれております。牛荘のペスト騒ぎさおさまったら、わたしは直ぐにアメリカさ渡る心算でおるのです。

ヨネ子　はあ……。

野　口　したからヨネ子さんにはその時までに心ば決めておいて欲しいのです。

ヨネ子　は？

野　口　わたしと一緒にアメリカさ渡るか、日本でわたしの帰りを待っていてくださるか。

ヨネ子　あの、ちいっと待ってくなんしょ。

野　口　ええ待ちますとも。お返事は半年先で結構です。そうそう記念によい物ば差し上げましょう。

ヨネ子　あの、野口さん。

野口、構わず制服のポケットから一葉の写真を取り出した。

野　口　この凛々しい制服ば着用したわたしのポートレートです。銀座の写真館で撮らせました。どうですなかなかよく写っているでしょう。

ヨネ子　え、ええ。

野　口　どうぞ机の上にでも飾ってください。それで代わりにあなたのポートレートば頂戴したいのです。

ヨネ子　は？　いえ、わたくしにはこのような写真は。

野　口　多少写りさ悪くても構わね。実際のあなたの美しさはわたしが一番よく知っていますから。ただ異郷の地にあってはあなたに逢いたくても逢えません。せめてあなたの写真さ眺めて寂しい心ば慰めてーのです。どうか恋人ば鼓舞激励すると思って。

ヨネ子　申し訳ありません。わたくしは一枚も持っておりませんので、またい

ずれそのうち撮るようなことでもありましたら。

野　口　したらどうだべ？　いっそこれから写真館さ行って御一緒に撮ろうでは（ない）ねーですか。

ヨネ子　そんな、夜も更けておりますし写真館も仕舞っておりましょう。

野　口　なに戸を叩けば開けてくれますから。

ヨネ子　どうぞお許しください。それにそろそろお出にならないとお帰りの汽車さ間に合わなくなりますわ。

野口、時計を見る。

野　口　……そうですね。仕方ね。残念だけんじょ写真はあきらめましょう。終列車は十時半ですから少し早足になりますよ。

ヨネ子　え？

野　口　では参りましょうか。

野口、制帽を被って立ち上がった。

ヨネ子　あ、あの。

野　口　これでしばしのお別れです。新橋ステーションまで一緒に歩いてどうか汽車さ見えなくなるまで見送ってくんつぇ（もらわんべな）。

ヨネ子　すみません。今夜はこのように雨模様ですし、どうかこのままここで失礼させてくなんしょ。

野　口　したけど（いんだよ）これで当分の間わたしとは逢えませんよ？

ヨネ子　それでも……少し風邪気味でもございますし。

野　口　なに風邪？　それはいけねーなシ。

野口、右手をさっとヨネ子の額に。

ヨネ子、驚いて思わず野口を突き飛ばす。

ヨネ子　何するんですか！

野　口　ふむ。熱はねーみてえだげんじょ、よし。では着物はだけて胸ば出して。

ヨネ子　ええ？

野　口　さすけね。わたしは医者です。恥ずかしがることはねーから。

ヨネ子　どうぞもうお帰りください。
野　口　いや、帰るのはやめだ。
ヨネ子　はァ？
野　口　今夜はこの部屋ぞ泊まり込んでわたしが付きっきりで看病しますから。
さ、まずは布団ぞ敷きましょう。

押入から布団を出そうとする野口を止めようと飛びつくヨネ子。
二人はしばし揉み合う格好となる。

ヨネ子　や、やめてくなんしょ！
野　口　さすけね、わたしが敷きますから。
ヨネ子　やめてえ！

そこへお内儀が箒を手に飛び込んで、野口の尻を打つ。

野　口　イタタ！　何するんですか！

お内儀　いいかげんにおしよッ！　あんた山内さんが嫌がってんのが分からないのかい？
野　口　嫌がる？　わたしはただ布団ぞ敷こうと（もう一度打たれて）アイタ！
お内儀　山内さん、あたしゃもうどうにも我慢がならないよ、堪忍袋の緒が切れちゃった。こうなったら全部ぶちまけちまうからね。
ヨネ子　小母さん。（オロオロする）
お内儀　山内さんはね、あんたのことがずーっと前から嫌いなんですよ、まるで毛虫みたいに。
野　口　け、毛虫？
ヨネ子　（小声）小母さん、そこまでは言ってね。
お内儀　言ったじゃないあの手紙を読んだ時に。まるで毛虫がもぞろもぞろ背中を這ってるような心地がするって。
ヨネ子　あ、あれは。
お内儀　よござんすか野口さん、全部本当のこと言いますよ。あんたの小包も手紙もちゃんとこの人に届いてますよ。
野　口　え？

お内儀　山内さんはあんたの手紙を読んでホトホト困り果ててね、それでこのあたしに相談なすったんですよ。可哀そうに半分ベソかいてたんだよこの子は。だからあたしゃね、こんな物はじめっから届かなかったことにしちまやいいんだってそう言ってやったんですよ。後は知らん顔してスッ呆けてりゃそれでいいって。だから悪いと思ったけどさ、あの本はあたしが売っ払っちまいましたよ。そのお金で皆で精進落としに牛鍋食べに行きましたよ。

野　口　野口さん、あんたただって知ってるでしょ。この人はね、亡くなったお父上の様な立派なお医者になって、若松の山内家を再興しなくちゃいけないってお人なんですよ。ただひたすらお家再興の為にと一心に勉強に励んでなさる偉ーい娘さんなんだ。女が医者になるだなんてただでさえ並大抵のこっちゃないってのに、今は惚れただのハレただのとそんなことにかまけてる時じゃないんですよ。それを何ですか。あんたは先輩のくせしてこの子の勉強の邪魔ばっかりして。山内さんが大人しいのをいいことにそんな気味の悪い手でこの子に触ったりして。恥を知りなさい恥を！

お内儀　小母さん、もういいわ。

ヨネ子　いいや、あたしゃ今日こそは全部言ってやんなきゃ気が済まないんだ。

お内儀　野口さん、ぜんたいあんたが吉原だの洲崎だのっていかがわしい場所へせっせと出入りなさってんのを、あたしたちが知らないと思っておいでなのかえ？　ええ？　そんなね、ちょいとばかり頭がいいんだか何だか知らないが、そんな不良の片輪者にね、ウチが大事に預かってる下宿人にちょっかい出されてたまるもんか！　あたしの目の黒い内はこの子にあんたのその気味の悪い指一本だって触れさせやしないんだからね！

ヨネ子　小母さん、もうやめて！

お内儀、ようやく黙った。

野口の顔面からはすっかり血の気が失せている。

ヨネ子　……ごめんなさい野口さん。御本の代金は後日わたくしが弁償いたしますから。どうか今夜はこれでお帰りになってくなんしょ。

しばしの沈黙……。
雨の音……。

野　口　……すまねーなシ。ずっと他の女子とは違うと思ってたから。
ヨネ子　え……？
野　口　すまね。あんただってやっぱりこだな醜い左手さ持った男は嫌だべな。オラ、ずっと勘違いしてた。
ヨネ子　……。
野　口　医者さなろうだなんていう女子だから、他の女子とは違ってオラの手のことなんて気にしねーはずだって……オラ勝手にそう思い込んじまってた。
ヨネ子　わたしは野口さんの手のことなど何とも思ってねーです。
野　口　いいんだ。醜いもんはなじょしたって醜いもんなィシ。……すまねーなシ。全部オラの勘違いだった。
ヨネ子　そういうことではねーのです！
野　口　したらどういうことだべか？　オラほど出世の見込みのある男が他におるけ？

ヨネ子　……。
野　口　……あ、そうか。オラの家さ百姓だからな。いくら同じ会津でも士族の娘と水呑みの倅では違うべな。やっぱり釣り合わねーべな。
ヨネ子　……。
野　口　したらこれで。
ヨネ子　待って。
野　口　もういいべや。
ヨネ子　正直に言います。わたしは野口さんのことさ嫌いではねーです。
野　口　……え？
ヨネ子　したけど好きでもね。
野　口　……。
ヨネ子　本当にどっちでもねーのです。勉学の上ではむろん尊敬ばしておりやーす。したけど、左手さどうだとか、水呑みの倅だとか、そだなこと気にする野口さんのことは……それ以前に人として軽蔑します。野口さんは……野口さんはそれでも会津の男ですか！
野　口　……。
ヨネ子　もっと胸さ張ってけろ。

野口、悲しげな顔でヨネ子をじっと見る。
ヨネ子、たじろがない。
雨の音……。
野口、静かに一礼して悄然と出て行った。
ヨネ子、力が尽きたように座り込む。
お内儀がその肩を優しく抱いてやる。

お内儀　……よく言った。偉かったね。
ヨネ子　小母さん、あたし……。
お内儀　いいんだ。あれでいいんだよ。あれだけはっきり言ってやれば向こうだってすっぱりあきらめられるってもんさ。

ヨネ子、うなずく。
と、野口が戻った。

野　口　わかった。オラもっと胸張るべ。この手のこともう二度と言わね。そして必ず、日本で一番有名な医学者さになってやっから。

ヨネ子　……。
野　口　したから、オラおめのことさ絶対にあきらめね。

野口、一礼して出て行く。
ヨネ子とお内儀、ぐったりとうなだれた……。
音楽……溶暗。

奥住、客席に向かいて立つ……。

奥　住　野口博士の初恋の人であった山内ヨネ子さんはその後無事にお医者様となり、会津若松で山内医院を再興されました。御結婚もされ四人のお子様を育てながら六十五歳を超えるまで、近在の誰からも慕われる女医として開業医をお続けになったそうです。ニューヨークでヨネ子さんの幸福な結婚生活を知った野口さんは「夏の夜に飛び去る流星、誰か之を追うものぞ。君よ快調に世を送り給え」とたいそう悲痛な言葉を書き残しておられます。……いやはや。一方のヨネ子さんは後に新聞の取材に答えて「若い頃わたくしと野口博士が何か特別な関係に

でもあった如くにおっしゃる方がおられますが、そのような事実はまったくございませんでした」とこちらはバッサリと一刀両断に述べておられますので、どうやらこの恋は最後まで野口さんの残念なる一方通行に終わった様でございます。……さて、この翌る年の七月、清国牛荘からお帰りになった野口さんは再び血脇守之助先生の東京歯科医学院に転がり込みました。清国においても例の鬱勃たるパトスは止み難かった様で、蓄えるはずだったアメリカへの留学費用も一向に貯まらず、伝研も検疫所も辞めてしまい、また振り出しの無一文の身に戻ってしまわれたのでした。窮した野口さんは八子弥寿平さんに渡航費用を無心しましたが、これは故郷の恩師小林栄先生に叱られて沙汰止みとなりました。……いやはや。しかし驚くなかれ。ここから野口さんは、何と顔も見たことがない某家の御令嬢と婚約をなし、その家からお金を出させるという大胆な方法で渡航費用を捻出してしまいます。そしてその年の暮れ、いよいよ米国ペンシルバニア大学のフレキスナー教授の元へと旅立つことが決まったのでした。時に明治三十三年の十二月、野口博士まもなく数えで二十六となる頃のことです。

奥住の姿が消える……と、舞台が変わっている。